

京三中・山城高同窓会 会誌

双ヶ丘



第4号 2010/10/15

目次

巻頭言

後藤新平の残した言葉

西陣界隈の映画館

岩田康子女史を訪ねて

永平寺町から発信

バリに想う

酒を飲むなら

辻先生をしのぶ会

ドイツと国際交流

各報告

防人の詩

彙報

クラブだより

表紙の説明

作者： 1年 9組 板舩 笑果

題材： 『風花』

参考にした古典： 『牛櫛造像記』

作者のねらい： 文字は、花が散っている
イメージだから、方勢で
書いて、力強さを出して
風で花が舞っている雰囲気
を出したかった。

写真撮影： 公民科教諭 渡邊 一郎

言 頭 卷

会誌の復活

会長 森 貞 男

京三中・山城高創立百年記念事業は盛会裡に幕を閉じました。その時京三中卒の先輩方は江羅寿夫会長をはじめ同窓会の役員を勇退されました。そのあとを山城高卒が引き継ぐことになりました。

そもそも同窓会活動とは会員相互の親睦を図り、母校の発展に協力することです。

同期の親睦会はそれぞれの学年で行われていますが、全体となると五年とか十年の区切りの年にその時の都合で行われてきました。

会員名簿は五年毎に発刊されていましたが、プライバシーの問題等で平成十三年を最後に発刊していません。会報や会誌もその時の流れで発行されたり、されなかったりでした。今回名簿作製に変わるものとして会誌を復活させ、毎年発行することで会員の絆を深めようではありませんか。伝統を誇る実績も年とともに受け取る感じ方は異なりますが、先輩や後輩の多くの会員からの文章で盛り上げれば在校生の今後に少しでも役立つのではないかと思います。

会員の皆さんのご協力をお願いします。

後藤新平が残した言葉

5回 高林 藤樹

後藤新平は明治から昭和にかけて活躍した政治家である。初めは医師であつたが、愛知県医学校で名を挙げて認められ、内務官僚となり、政治家となつた。関東大震災では第七代東京市長、内務大臣、帝都復興院総裁などとして功績がある。



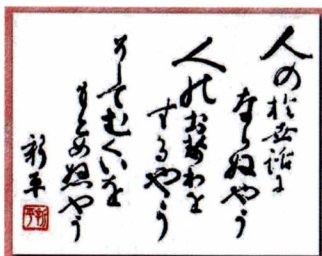
こうした政治家としての顔とは違い、後藤新平には教育者としての知られざる顔がある。世の中には教育屋と言われ、教育界を渡り歩く官僚がいるが、これらは教育

者ではない。後藤新平は現場に出て子ども達と直接触れ合い、生々しい実践をした。あるいは自宅に子供達を招いて一緒に遊んだりした。これらのことをボーイスカウトという大きな組織の総裁という要職にありながら、実践したのである。これこそ教育者である。

先年、NHKのドキュメントで後藤新平の一代記が放映されたが、その時の内容はボーイスカウトに関しては全然触れられておらず、私共スカウトに関係する者にとっては失望であつた。

後藤新平は昭和四年四月、岡山へ遊説に赴く途中、車中で脳溢血を起こして倒れ、京都病院に入院した。病室が満員であつたので院長は政界の重鎮に対して何かと氣を使うのに彼は頑としてこれを制した。最

後に病室を移るのにスカウトの子供達が付き添うというのでついに応じたというエピソードが残っている。



上掲の言葉は後藤新平の遺訓として有名な句であるが、

スカウトが学ぶ社会への奉仕とは、割り当てられる勤労奉仕ではなく、腕試しとして自ら買って出るものであることを教えている。

もう一つ、後藤新平は「財を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。」と言つた。私は言葉を残して死ぬ者は特上だと言いたい。後藤新平は実践もした特上の紳士である。

西陣界限の映画館



我が家の庭「千本通」

水野 悟

今とちがつて昔は「道路」は子供たちの遊び場所だった。広い表通りも細い裏通りも同じで、ガキ大将を先頭に戦争ゴッコやかくれんぼに明け暮れていた。

のんびりした時代だったとは云え、電車や車などかなり交通量の多い千本通りでも同じだったから、しよつちゅう怪我をしていた。狭い家の中では兄弟ゲンカをしてホーキで追いかけられてハタキで応戦する。ハダシで表へ飛び出す、ガラスが割れる。家の向いは河村ガラス店、ガチャンと音がしてしばらくすると、店の奥に座っていたおじさん

が、物差しを持って「今日は何処ですか」とやって来る。勿論、支払いが月末までとめて払われる。

つまり、ハダシで飛び出すと云うことは、千本通りは僕達の庭だったのである。成長して「千本」(なつかしい言葉だ)をする様になると、数ある映画館は全部庭つづきだから映画は生活の一部に組み込まれていた。

勿論、顔パスではなかったが、大人も娯楽の第一は映画だったから、よく連れて行ってくれた。この広い庭の中には映画館だけでなく、お菓子屋、うどん屋、喫茶店、カフェ、ストリップ劇場といういろいろあったから、後々、「よく不良にならなかつたな!」と友達に云われたものである。さて、西陣織の街として、多くの人に支えられた千本通りの商店街

や娯楽街、織物が斜陽化してからは物静かな街に変貌してしまった。夜はパチンコ店と駐車場のキラキラだけが明るい街になってしまった。

もともと、西陣織の中心は今出川大宮あたりで、五辻付近の間屋さんを中心に徐々に北大路、堀川、壬生、西大路にまで広がっていった。

地域が広いだけに西陣以外にも、それぞれの町にも芝居小屋や、映画館がポツン、ポツンと存在していて、地元の人にとっては、そこが思い出の場所だったかも知れないが、休日の楽しみに出かけるとなると、やはり千本通りの西陣京極が繁華街の中心だったと思う。その点、四条通や河原町と違って、歩いても行ける親しさがあった。

千本丸太町のそばに大極殿跡があ

るように、千本通りは朱雀大路としての歴史がある。だから表通りの商店には旧家が多く、一步裏側にまわれ

ば殆どがお寺の広い敷地で、家々はその間をつなぐ路地に向き合って暮らしている。住居兼職場の地域である。僕が生まれたのはこの千本通り

のど真ん中、中立売と一条の間、長久座の斜め向いである。当時は雨戸

を閉めて寝ていたから、ガシャ、ガ

シャと雨のような音に眼をさますと

晴天、早朝から機織りの音がよくひびいた。通りの真ん中を市電が走り、

毎日賀茂から野菜などをつんだ荷車を引いたおばさん達が南へ下り、北

へ帰っていく姿が見られたし、近頃よく話題になる電池自動車の先駆

け、GSバッテリーの社長、島津源蔵さんの乗ったシルクハット型で黒

塗りの車、「デトロイト号」が家の前を音もなく、風の様に走り去るのをよく見かけたものである。

堀川通は市電北野線の路線通りであつたから、千本通りは烏丸通から西では一番の大通りで、市内を走る電車も千生車庫を出て、千本通、今出川通、東大路通、四条通を廻り、この内側がいわゆる市の中心部である。

西陣は毎月、一日と十五日が織子さんたちの休日で、実に賑やかだつた。それに商売の街でもあつたから、料理屋さんも多く、上七軒のお茶屋さんや、南には五番町があり、北野天神まで続く中立売通の商店街と共に、生活を充たす全てのものが揃う街だつた。小生の家のまわりには、千本中立売の角に一時期、高島屋のストアがあり、その向いには時計

塔を持った木村時計店、少し上がった所には「米久^{ヨネキユウ}」という大きな牛肉屋さんで、二階はすき焼きの店、それと競うのが千本今出川の「ときわ」と云う、これも立派なすき焼きの店

が繁盛していた。「米久^{ヨネキユウ}」の北隣に、履物屋さんの梅棹さんがあり、この家の息子さんが国立民族博物館の初代館長の梅棹忠夫さんである。その

二軒北側が西陣京極の入り口で、角にはチケット売場もあり、上映映画のポスターやスチール写真が貼られていた。僕は毎日この角を曲がり、映画館の前を通って正親小学校へ通っていた。この奥には西陣大映、東映、千中ミュージックなどがあり、もとは寄席や芝居小屋から転じた所ばかりである。

千本通も昔は今の道幅の半分しか

なく、市電を通すため、西側の家を七メートル程こわして広くしたそうである。

子供の頃、向いの家へ遊びに行くと西側にくらべて奥行きが深く、三、四十メートルはあったかと思う。正に「うなぎの寝床」である。

さて、小生の家は以前は料理屋だったらしく、玄関を入ると石畳の奥に二階へ上がる磨き上げた木の階段があり、これがその名残で、そのまま二階の齒科の受付、待合、診察室へと続いていた。向いは砂糖問屋の小西商店で、京都御所へも商品をおさめていた。昔はよく箱詰めにした砂糖が贈答に使われていたので、大変はやっていた。この三軒北隣が長久座である。戦時中はニュース映画館となり、戦後は洋画を長くやっていたが、その後新東宝の封切館と

なった。その北側から一条通までは長瀬産業の本社で（現在は大阪に本社がある）ドイツから薬品などを輸入している会社で、社長のお屋敷が仁和寺の近くにあり、迎える車が来て父がよく往診に行っていた。

今では考えられないが、千本通から西には歯医者がほとんどなく、宇多野にあった療養所へも家の馬車で毎週往診にでかけていた。

その頃家で小馬を飼っていて、人力車のような車体をひっぱっていた。又、太秦の撮影所からも電話があつて大友柳太朗やスタークラスの人とは撮影所の車で来て、表に待たせて診てもらったりしていた。チョンマゲ姿で来ているのを見たことがある。一条通の西南角が、魚新の女将さんの実家で呉服屋さんだった。

ところで、平成三年頃に「京都を語る会」と云う所から「京の町並み」など十冊の本が刊行され、その中の一冊に「西陣の史跡、思い出の西陣映画館」として建物の写真や記録、それにパンフなどが七十頁余に渡って掲載されている。著者にとつても庶民的な西陣娛樂街の思い出が強かったであろう。

一条通から五〇メートル程北に千本座があつた。尾上松之助が開いた芝居小屋で、大正元年にはもう、日活映画の常設館となっている。我々が親しんだ頃は洋画を上映していた。この映画館の裏が大頂寺、浄福寺とつながり、日本初の映画ロケが行われた所である。裏でチャンバラを撮影し、表で上映していたわけである。小学生のうちは親に連れられて

いった映画も、三中の一年生の八月に戦争が終わると、もう十月頃には学校中の同好者が集まり、映画部を作った。やがて昭和二十二年秋には京都中の公私立高校を巻き込んで京都高校映画連盟を立ち上げた。こうなると一気に行動半径はひろがった。朝日会館、京都日活、京極東宝、菊映などよく映画鑑賞会に利用した。

さて、話を西陣界限にもどすと、最盛期には全部で二十九館の劇場や映画館があり、千本通近辺だけでも十二館ほどあった様である。僕は洋画が好きで見ていたが、邦画で印象にのこっているのは、昭和十四・十五年頃に昭和館で封切られた「愛染かつら」である。

連日満員。表は長蛇の列ができた。当時の小さいチラシ（十センチ程の

ザラ紙）に十二月六日からの前編に続き、後編が十二月二十日からの正月映画として封切られ、余りの評判の良さに完結編を作ることになり、中国にロケをして「猛撮影中」の予告をしている。主題歌の人氣と相

まって世の男女の紅涙をしぼったもので、小生も上原謙、田中絹代を何度も見に行った。支那事変の間も太平洋戦争の始まる昭和十六年十二月八日迄は意外にも洋画は（アメリカ映画も）多く上映されており、正に開戦前夜とも云える十一月三十日に京都座から発行された「蘇州の夜」

のパンフに「日米英戦わんか」「鉄銅動員下る」の檄文がのつていながら洋画の予告ものつていた。さすがに十二月八日以降は米英仏の映画は上映されなくなったが、ドイツ映画

だけは昭和十八年頃迄上映されていた。潜水艦でフィルムが運ばれて来ていたのは有名な話である。

戦争が終わるとアメリカ映画がどつと這入つて来た。最初はどうかとこんな映画が、と思うくらいB級の海洋劇や喜劇が並び、しばらくして国内も落ち着いてきて「オーケストラの少女」が上映された時には大感激したものである。

独仏などの戦前の名画はしばらく上映が禁止されていたが、割に早く解除されて「自由を我らに」「ペペル・モコ」「舞踏会の手帳」など往年の名画を見る事が出来るようになった。

さて、あれ程お世話になった映画をいつ頃から見なくなったのだろうか。一つの画面から色々の文化やトキメキを与えてくれた映画は、テレ

ビに取って変わられた。絵や風物が動き始めてから、作り方や道具の進化にもなつて表現の仕方が変わり、フィルムが電気信号に変わつても視覚の楽しみはこれからも栄えると思うと楽しいが、僕らの庭、千本通の役目は終わったのだろうか?と思うと少し淋しい。

おわりに色々集めた資料の中から面白いものをメモして見ようと思う。

東京池袋人生座のパンフに戦後公開されたフランス映画の公開年が載っている。主なものを上げてみると

昭和21年 ヨシワラ、うたかたの

恋

昭和23年 美女と野獣、旅路の果

て、海の牙

昭和24年 しのび泣き、大いなる幻

影、北ホテル

昭和25年 めぐり逢い、田園交響楽、

情婦マノン

昭和26年 パルムの僧院、オルフェ、

鉄格子の彼方

又、戦前、子供ながらに長久座で見た洋画の一部を書き上げてみると

戦場よさらば(ゲリー・クーパー)

禁断の家(ダニエル・ダリユ)

進め騎兵隊(エロール・フリン)

モダン・タイムズ(チャップリン)

外人部隊(新版)(マリー・ベル、

フランソワーズ・ロゼエ)

舞踏会の手帳(ルイ・ジュールヴェ、

マリー・ベル)

今から考えると、当時、映画を見る子はとてもまかせていたのである。

ちよつと歩けば

そこは映画館

4回 福地純一郎

今から思えば嘘のような話だが、私の今の住まいから家の数にしておよそ六、七軒南へ行つたところに映画館があつた。最初は「待鳳館」と言い、後に「轟館」と名を変えた。その名の通りかの人気女優轟夕起子がオーナーだったという。そういえばこの映画館の真横に牧野静子さんと言つて、映画の父牧野省三氏の次女にあたるかたが住んでいたし、轟夕起子は当時、牧野省三の長男であるマキノ雅弘氏の奥さんだったので、いろいろ曰く因縁があつたのだろう。静子さんはいたつてきさくなかたで、道で出会うと子供の私にも、

いつもにこにこと挨拶してくれた。

戦争が終わる二年ほど前に轟館は取り壊され、跡地の半分は貯水池、と言ってもただ二メートル程の深さに地面を掘っただけのもので、コンクリートの枠もなにもないただの水たまりのようなものであった。あとの半分は近所の人たちの畑で、めいめいすき勝手に野菜を作っていた。私の家族も僅かな面積を使わせてもらって、かぼちゃや茄子を作っていた。収穫時期になると、折角作ったかぼちゃなどはよく盗まれたものである。轟館の周りはトタンの波板で塀が作っており、クーラーなどの無いころのことで、映画館の横の出入り口を開けるものだから、トタンの隙間から映画がよく見えた。子供たちがトタンの隙間に目を当てて良く

見ていたものだ。そんなに近くに映画館があったのに、轟館で映画を見た記憶はあまりない。田舎から祖母が来たり、下関の叔母が来た時に数回連れて行って貰った記憶しかない。一度は映画だけでなく漫才を見た覚えがある。それよりも、映画館の隣に洋食屋さんがあって、下関の叔母はかならずそこでピフカツを食べさせてくれたので、その記憶の方が鮮明だ。



北大路旧大宮下がつたところにあったのが「久栄座」、後の「大宮劇場」で、後年ストリッ

プ小屋になってしまったが、映画部にいた頃はれっきとした映画館であった。かの黒沢明監督の「静かなる決闘」などをここで観た記憶がある。ストリップ小屋になってからは、顧問先の不良社長に誘われて、先年亡くなった清水君と一緒に、周りを気にしながら何度か足を運んだものである。付近の人は「久栄座」のことを「サエザ」と発音するので、ど



ういう字なのか見当がつかなかったが、前回の地図を見てはじめて本当は「ヒサエザ」というのだと知った。近くに住

む友人の話では、このあたりの何とかいう女性がオーナーだったそうで、案外その女性の名前が「久栄」さんだったのかも知れない。現在は駐車場になっているが、この駐車場の名前は何と「大宮劇場駐車場」で、劇場の名前を残そうとしたのか、それともただのズボラかは定かでない。

千本鞍馬口を少し南に下がったところに「千船座」という芝居小屋があった。名前は千本通・船岡山に由来するのだろう。ものの本によると「汚い事も京都一だが喜楽なことも京都一」だったそうである。客席で寝そべっての観劇などは当たり前のことだったらしい。ここで映画をやっていた記憶はなく、一度入ってみた願望はあったが、ついに一度も入っ

たことはなかった。ただ、芝居の看板はいつ見ても「江味一郎一座」となっていた。一座は長年ここに住み着いていたものと思われる。亡くなった私の家内の実家が近くにあり、よく仕舞風呂に行くとき、化粧半落としての役者が来ていて、あんまり気持ちのよいものはなかったと言っていた。なんとなく想像がつく。この芝居小屋は割合長く存在したようだ。やはり跡地は現在駐車場になっている。

新大宮北大路を三丁ほど南の「大宮東宝」、懐かしい映画館である。よく清水君とペアで割引券の交渉に行った。名前は忘れたが、堀雄二に似た、ちよつと男前の支配人がいて、山城高の生徒の利用者は多いほうではなかったが、それでも何かと

便宜を図ってくれた。「青い山脈」はここで観たのかも知れない。何という映画か、題名は忘れたが宝塚から映画入りのヨッタンこと久慈あさみのデビュー作品や松緑、梅幸など歌舞伎俳優が出ていた稲垣浩監督の「群盗南蛮船」、なんと言っても稲垣監督の「佐々木小次郎・前後篇」が忘れ難い。大谷友右衛門（現・中村雀右衛門）扮する佐々木小次郎は若々しく新鮮で女性の心を一気に掴んで人気はたいしたものだった。失礼乍ら今の雀右衛門丈と同一人物とは到底思えない。この映画に関しては、割引券の発行枚数も抜群に多かったと記憶している。この大宮東宝も閉館して暫くは市場になったり、駐車場になったり、今はすっかり建て替えられて「薬ヒゲチ」の店

舗になっている。

映画部にいた頃の西陣京極は我らの天下で、「西陣映画劇場」、「西陣国際映画劇場」、「西陣東映」、「千中劇場」と幾つもの映画館が軒を連ねていた。「西陣映画劇場」は通称「西キネ」で通っていたし、「こくさい」と言えば「西陣国際映画劇場」のこどだと通じたものである。「西キネ」の前あたりに「マリヤ」という喫茶店があった。ぜんざいが有名で、甘い物に飢えていた頃でもあり、映画の帰りによくこのぜんざいを食べた。西陣京極の「マリヤ」は現在も千本中立売を少し南の西側でやっている。昔通りの「マリヤ」の看板が懐かしい。先日「マリヤ」に寄ってみた。「ぜんざい」は健在だった。

それにしてもなぜ。「マリヤ」でなく「マリヤ」なのか不思議だ。「アベ・マリヤ」「聖母マリヤ」が普通だと思いが、聞いてみたら案外「毬屋」をカナにただけかも知れない。「千中劇場」は後に「千中ミュージック」と名を変え、ストリップ小屋になった。ここにも先にお話しした不良社長に付き合っ二度ほど行った記憶がある。後年火事を出して全焼した。今は例に洩れず駐車場になっている。現在中立売通りと西陣京極通りをぶち抜いて大規模な工事が行われている。何が出来るのか近所の住人とおぼしきおっさんに聞いてみた。「ここはパチンコ屋になるらしいおっせ」とのこと。人通りが増えて西陣京極の数軒の飲み屋も多少潤うだろうし、これも時代、仕方のない事か。

千本通りは、中立売をはさんで「千本日活」「長久座」「昭和館」の三館が競っていた。中立売の東南角にもう一軒映画館があったようだが、あまり記憶にない。これらの映画館は、映画部のOB達にとつては縁の深い三館ではある。当時、「千本日活」はハリウッド映画の封切館で、三館中どちらかと言えば設備の良かった映画館で、映画部連中が最も足繁く通った映画館ではなかっただろう。「長久座」は大映映画の封切館、時代劇が多く「昭和館」は少しハイカラな女性向きの松竹映画の封切館だった。「昭和館」については苦い思い出がある。黒沢作品「白痴」の共同観覧をやったときに、ある女生徒があるうことか犬を連れてきた。

水商売にとって「犬」は「居ぬ」「去ぬ」「猿」は「去る」に通じ、最もタブーとされる動物で、支配人はカンカンになって、絶対に駄目、入れる入れないで大モメになった。仕方がないので映画館の前の電柱に犬を繋いで私が見張っていることでやっと決着がついたのだが。映画館の中も外も気になって共同観覧どころではなかったのを今でも覚えている。「千本日活」は西友系の「無印良品」の店、「長久座」は建て替えられてローションになっているが、長久座を取り囲んでぐるりとあった飲み屋街の路地は今でも健在である。

このような昔話を見ると、今でも映画館はあるのではないかと言うだろうが、今あるのは単なる区切られた

映写室であって、決して映画館ではない。映画館というのは独立した一館で、上映中に客席に入ると真つ暗がり、暗闇になれるまでは手探りでオズオズと歩きながら空席探し、少々トイレの匂いが漂い、時々は二階の暗幕が風に煽られスクリーンが真つ白になって観客は一斉に二階を振り向き、又ときには映画の途中でフィルムが切断し、観客は辛抱強く何分か待ち、面白い場面には大きな口をあけて笑い、痛快な場面には一斉に拍手を送る。売店は制服の若い女性がコーラやポップコーンを売っているのではなく、おばさんがそれぞれおせんにキャラメル、酢昆布、あんぱんを売っている。これが映画館というものだ。残念乍ら映画館は全滅したが、こんな映画館に出会いた

ければ、映画「オリオン座からの招待状」か「カーテンコール」、洋画ならあの名作「ニュー・シネマ・パラダイス」か「マジエスチイック」を観るしか方法がなくなった。



昭和35年頃の西陣京極入口

岩田康子女史を訪ねて

12回 岸野 洋

あれは山城陸友会のミュンヘン懇親会だった。去年の暮れか、今年の初めだろう。毎月第2木曜に決まっている会だ。高林藤樹会長（第5回卒業）が「山城高校出身の女性で、



去年の関西経団連の輝く女性経営者大賞をもらった人がいるよ」と言ったのが、始まりだった。山城高校第18回卒業の岩田康子さんのことだった。今、滋賀県大津市伊香立でブルーベリー栽培と無農薬の素材を使い、ブルーベリーフィーズ紀伊国屋治兵衛というレストランを経営しているという。高林会長は一度会っていて、既に、お気に入り女性のようで、一度、食事に行かないかと誘われた。暫くして彼女が載った日経新聞の別刷り特集が自宅に届いた。

大きな記事だった。見出しは単刀直入に「康子さんのブルーベリー」だ。農園の写真が大きく小さく、ふんだんに使っている。防鳥ネットで剪

定中の康子さんが写っている。二人の子供を抱えて離婚して、35歳からの独力でブルーベリー栽培を始めたサクセスストーリーが記事になっていた。署名入りの記事で、3ページ目の最後に（松本和佳）というライターの名前があった。康子さんの人生を浮き彫りにする巧みな書きようだ。前文が唸らせる。康子さんの今までとこれからを表現している。あまりの上手さ、転載させていただく。

「最初は生きるためだった。大地に這いつくばってたった一人で植えた、六百本のブルーベリー。自然と格闘し二十五年、実りの農園を手に入れた今、岩田康子の思いは膨らむ。「農を、そして食を伝えたい」」

不思議な縁というか、日経特集の写真で見た康子さんに会ったのは、それから、2、3日後だった。大津市の県庁前にある築56年の滋賀会館で、北海道の入植者のドキュメント

映画上映の関連事業で、お米の食べ比べという企画があった。滋賀会館3階は県文化振興事業団の事務局本部があつて、我が職場である。お米の食べ比べ？面白そうだし、会費は500円だ。腹ごなしにーと思つて、4階の文化実習教室へ上がった時、部屋の前に協賛者の名前があつて、そこで偶然、岩田康子さんの名前を見つけた。ひよつとして？と思つて入ったら、写真の岩田さんがいた。ブルーベリー色のセーターを着ていたので、すぐわかった。お握りとセツ

トの味噌汁を作っている。一直線に喋りかけて、先輩―後輩の間柄を確認した。もうそれだけで初対面という感覚がなくなった。

無農薬の米づくり、釜で炊くご飯：滋賀県内の生産農家の人たちや大農学部のコランティア学生さんらが多数来ていた。康子さんは、北海道で7年間フィルムを回し続け、農業の自給の大事さ、自然食の意匠を問いかけた田代陽子第1回監督作品「空想の森」に共鳴して、率先垂範のイベント応援だった。炊いたご飯の握り方で、○型はコシヒカリ、△はキヌヒカリ：とお米の種類を当てあう企画だ。会場の真ん中のテーブルに先に座っていたら康子さんが

「先輩の横で：」と隣りに腰をかけた。味噌汁の世話などで忙しそうで、そう話す時間はなかったが、日経で読んでいたような人生の苦勞を少しも感じさせない人だなあーとの印象だった。

ブルーベリーフィーズ紀伊国屋へ行ったのは、それから3カ月後だろ。うか。JR湖西線堅田駅で紀伊国屋さん送迎の車に20分あまり乗った。大津市の道路行政が民有地との絡みでうまくいっていないとかで、悪路が多く、道は狭い。車はクネクネ上つて、柵田が続く田園地帯を抜けた。着いた紀伊国屋は標高650m、京都との府県境・途中がもうそこだった。入り口に「ブルーベリーフィー

ズ紀伊国屋の横長の看板、鉢植えとレンガ畳みの庭道を行くと、放火にあうまでは自分の家だったという2階建てのレストランド。店内は外見とは異なつて、大きな柱がむき出し、古民家ふうだ。窓際にアンティークなテーブル。大きな透きガラスの向こうに琵琶湖が広がっている。窓の下は康子さんが1本1本手植えたブルーベリー畑だ。知り合いの園芸屋さんの情報があつて、1500坪（5千平方メートル）を1坪1万円で買った。人生の転機、2人の子どもの養育、慰謝料をつぎ込んだという。

春ごぼうのスープ、旬の桜鯛、天然酵母パン：一品一品厳選された自

然食のランチメニューが、琵琶湖を見下ろす窓際のテーブルに出て来る。もともと一日一客で始めたレストランド。原木の椎茸、有機栽培のごぼう、菊菜など食材は吟味され尽くしている。同席した康子さんが、ブルーベリー栽培の始まりから、どこかおかしい日本の農業のことで聞かれるままに話す。ニーズがあるのに作る人が少ないブルーベリーを思い立ち、書店で見つけた1冊の本を頼りに苗を650本購入、スコップだけで畑に立ち、次第に治水や土壌整備を学び、3年で実がついたと遠い昔を思い出すように話す。最初にふんわり巻いたネッカチーフは、薄いブルーベリー色だ。最初に滋賀会館で会った時もそう思ったが、ブ

ルーベリー色がよく似合う人だ。東京など各地からお客さんが来るレストランのこと、全国展開しているブルーベリージャムのこと、湖西の安曇川で息子さんがブルーベリー栽培していること、4割しかない日本の食糧自給率と減反政策の矛盾、同窓のよしみか、食事しながら話は縦横に展開して行く。大先輩の高林夫妻は我が子が喋るのを聞くが如くである。京都新聞社を退職して3年、今は滋賀県文化振興事業団に勤めていることもあり、一つ質問してみた。文化って、どんなことと思えますか。康子さん、間を開けず答えた。文化って、背筋がしゃんとすることですね、その回答の鮮やか、今も思い出す。

永平寺町から 新食材を全国発信

18回 中尾 四郎

紫陽花の色彩やかな梅雨時の午後、一通のメールが届く――。山城高校十八回卒の同級生、福井県立大学で生物資源学部長を務める宇多川隆君からで、「近くNHKラジオに出演するので、是非ダイヤルを合わせて欲しい」との趣旨。番組名は「こはふるさと 旅するラジオ」で、同番組には一年前にも大先輩の吉田義男・元阪神タイガース監督が母校・山城高校を舞台に出演されている。同級生諸氏にもラジオ全国放送の予定を案内し、永平寺キャンパスからのライブ中継に聞き入る。

学生の若い声に交じり、彼の懐

かしい声。「福井県に赴任して初めて『へしこ』を食し、その美味しさに大感激。しかも古くから地元につながる高度な発酵技術を生かした製法で、おおいに研究意欲をかきたてられた」という。ちなみに「へしこ」はサバをぬか漬けにして発酵・熟成させた若狭・越前地方の庶民の伝統食材で、酒のつまみや、お茶漬けに最高とのこと。発酵学が研究テーマの宇多川教授の指導の下、学生らは地場の伝統食材を用いた新たな食材開発に日々努力している様子が電波から伝わる。地元の醤油メーカーとのコラボで、これまで捨てられていたサバの内臓を利用して、特有の臭みを取り除いた魚醤（ぎょしよ）＝魚醤油ともいう）を生み出した。この魚醤油には血圧低下効果も期待できるらしい。この魚醤油（へ

しこ醤油）をスープに用いた「福井県立大特製ラーメン」を永平寺キャンパス内の学食で近々提供するという。私もぜひ福井・永平寺町を訪れ、「大学特製ラーメン」を食してみたくなった。この魚醤油は今秋には本



格販売の予定とか。

さらに、豚肉を糠の中で一年かけて発酵させた「へしこハム」も完成させたとか。今後、地元のシェフと本格的にメニュー開発するらしい。日本酒にもワインにも合うようだ。

ビジネスマンから大学教授に転身され三年めを迎えている宇多川君だが、ユニークな研究成果を挙げ地域貢献に汗をかかれています。人に惚れ、地域に惚れ、仕事に惚れる。何事にも真摯な彼の姿勢ゆえでしょう。いささか古いキャッチフレーズだが、「世界の調味料」で有名な某大手食品メーカーで培った経験も存分に生かして、若い学生とともに「食の宝庫・福井」から魅力的な食材をこれからも全国に発信し続けてほしい。

パリに想う（パリ紀行）

18回 河本 充

空港に降り立つと、またあのムツとした空気とエスニックな香りが懐かしい。

「アパカバール（元氣？）」「スラマソレ（こんにちは）」いつもの通いなれた店やレストランのスタッフそれにコテージの面々に声をかける。返ってくるのは「バイク バイク（元氣です）」「ソレ（こんにちは）」という返事と明るい笑顔。これで又パリに帰ってきたのやなア、と思う。学生時代（高校・大学・社会人も）サッカーに明け暮れ、社会人になってからも忙しくて、フトコロに余裕もなく、若いころから好きな映画やTVの旅行番組で海外への夢を膨らませ

てきた自分が、今当たり前のようにパリ島の一番賑やかなクタ地区の喧騒の中や、旅行者が出かけないような静かな田舎でノンビリと過ごしているのが信じられないというか、感慨深い状況です。



社会人後半には出張でアメリカや東南アジアへは何度も行き、それに個人でヨーロッパへはパリを中心にアチコチと出かけました。しかし、パリ島（インドネシア）には行ったことがありませんで

した。定年前の単身赴任で責任を任されて毎日が気の抜けないビジネスの連続で気分転換が必要になっていた頃でした。

女房がそれまでに知人の関係もあってバリ島へは何度か行っており「バリにハマったわー」と繰り返すもので、会社の定年前旅行制度を利用して先に行っている女房を追ってあまり期待もせずにバリ島のローカ



ルな飛行場へ降り立ったのが始まりでした。バリ島のイメー

ジという
と、サー
フィンや

ダイビングを中心としたビーチリゾート型。

又は静かなヴィラでスパを楽しみながらどこへも出かけずにノンビリと過ごす滞在型。

と色々ありますが、私の場合はクタ地区にありながら、緑に囲まれた静かなコテージに滞在して同じコテージ内で旅行社をやっているバリ滞在13年の友人と一緒に彼の仕事の下見も兼ねてアチコチ開拓に出かけるのが楽しみです。(たしかにバリではサーフィンやシュノーケル、パラセーリング、ラフティング、キンタマニー高原からウブドまで、33Kmのサイクリング、四輪バギー、釣り等いろいろした)。

朝は現地で買ったマウンテンバイクに乗ってクタビーチから空港へ続く海沿いの遊歩道を走り、そこから

Uターンしてスミニャック方面まで約12kmのサイクリングを楽しみます。ジョギングや散歩を多くの西欧人がしています。また砂浜では学校の体育の授業もやっていたりします。村で出している浜辺のワルン(屋台・食堂)で地元の人々の朝食風景や浜でパラソルの準備をしている姿を眺めるのも朝の楽しみです。たまにはパサルパギ(朝市)でサンバル(チリソース)の効いたナシチャンプルをブンクス(持ち帰り)して部屋で食べます。

皆さんも聞かれたことのあるインドネシアの食事でナシゴレン(焼きメシ)のナシはゴハンのことで、3期作も可能なライステラス(棚田)が田舎には広がっています。

田んぼの廻りにヤシやバナナの木が囲んでいるのを見るのは異国情緒

たつぷりで好きな光景です。小さな段々畑が連なっている景色は一見の価値があります。

バリ島は世界最大のイスラム国であるインドネシアの中にあつて、約320万人の人口で90%がヒンドゥー教という島(三重県位)です。首都ジャカルタのあるジャワ島とは3kmの海峡を挟んでいます。一時はオランダの植民地として、また太平洋戦争時には日本の統治を受けた時期もあります。しかし日本(人)に対しての印象は良く、理由は学校を建て、教育を広めてくれた、と感謝の言葉を聞くことも多いです。全島で制服が徹底しており識字率の高さは日本と変わらない程です。感心するのはカースト制が残っているものの、基本は村社会で年寄りを敬い、子供はみんなで育て冠婚葬祭や祭り

には必ず参加し、土地や祖先神への信仰が脈々と生きており、どこか懐かしさを覚えます。いっぽう観光産業での労働を目的として、ジャワ島を中心として移り住むイスラム教徒(約6%)の増加に社会不安が高まっているのも事実です。

また火山島のバリの北部には温泉の出るリゾートもありノンビリ過ごすには穴場です。

観光客があまり行かない山岳部には古くからの風習や(たとえば風葬)文化が垣間見れます。村の祭りや葬式で道路が大渋滞しても辛抱強く待ちます。何故なら村のそうした行事が最優先であり、村々で違う為いつ何時鉢合わせするかわりません。村では原っぱで火葬を見ることがあります。火葬をする日(曜日)が決まっているのでドライブをしてい



ると一日に何軒も見ることになります。

また田舎へいくとトイレに困ることがあり、有料

のトイレでも柄杓(ヒシヤク)で事後水を流すようなところも多々あります。これも慣れるとこんなものと平気です。

マレーシアやタイに比べるとまだバイクの数が多く、朝夕のラッシュ時には4重、5重に道路を埋め尽くし、車の左右から追い抜きをしますし、家族5人乗りも珍しくありません。

ん。子供（小学生）でもバイク通学しているのには驚きます。また産油国でありながら、ガソリンは給料に比べ割高（但し全島統一価格）で結構キビシイ生活です。

まあ、行くとびに色々なことが分かります、ビーチや街でのしつこい物売りでもコトバひとつで仲良くなるし、生活がかかっていると思うと、高くても買ってあげよう、とついつい日本人の甘さが出てくることもある意味許せるものです。

食事については何でもあります。が、近くの漁港に毎朝新鮮な魚介が上がり、マグロ・イカ・タイをはじめ高級魚のクエ（アラ）などがびつくりするほど安くゲットできます。まあ、知るほどにその生活・風習・文化への興味や人との交流で訪れるのかな、と思います。これから趣

味のカメラを撮り（景色・生活）ライブ（JAZZ・サルサ）を楽しみバリを満喫しようと思っています。

バリを去る時、「スラマティンガル（さようなら）」「サンペジュンパ（又会いましょう）」と言いながら「さあ今度はいつごろ来ようかな」と早や考えている自分がいます。

（バリへ行ってみようかなと思つたらツアーとは違うバリを紹介します。）

酒を呑むなら、やつぱり40 年来的知己

18回 佐々木 厚

還暦を迎えて二、三年になる。山城高校を卒業して45年。定年後の今は気楽な勤め人をしている。最近はどうちらかというところライフバラ

ンスを大切に思っている。とくに旧友と盃を酌み交わすときは至福のひと時だ。一緒に飲むのはやつぱり山城時代の友人が多い。

会社時代の飲み仲間、どうしても仕事がらみとなるので鬱陶しく、偶に飲むには良いが、頻繁に会う気にはなれない。その点やはり学生時代の友人は、気が置けなくて良い。しかし大学時代は東京だったので、今は地方に点在しており、飲みに行こうと言ってもそんな簡単に会えるものではない。高校時代の仲間は近在に住んでおり、ひと声かければ数名が直ぐに集まるのが良い。中でも一人、毎月一回は必ず盃を交わす友人がいる。お互い酒が好きと言うより呑みに行くのが好きなのだろう。最近、白梅町を中心に「呑み屋マップ」を作り、新規開拓に動んでいる

る。店の雰囲気は？酒の値段は？肴の味は？店主のサービスは？・・・これらの項目をお互いにチェックしながら飲む。そして自ら開拓したお気に入りの店を自慢する。やはり年齢の所為か、最近流行りの居酒屋チェーンはダメだ。値段は安いが見がいけない。油ものが多すぎてメタボを気にする我々には着いていけない。雰囲気も何か落ち着かない。世代が違ふのだろう。やはり昔ながらのこだわりを持った店が興味深い。今日も初めての店にトライする。まず店構えで品定めする。それから一呼吸を置いて暖簾をくぐる、この瞬間がちょっと緊張する。「席は空いている？」店主とのやりとりを二言三言。向こうも一見さんのこちらを観察している。風貌から見てややこしい客でないことは確かだ（と自分

では思っている）。ビールを注文する。大ビンか中ビンか？ここが大事なのだ。私はビール党なので大ビンが出てくれば嬉しい。（が最近は滅多にない）営業的に採算が合わないといと店側は言う、酒飲みにとってちよつとでも量が多いのはすごく嬉しいものなのだ。店主の心意気を感じる。こんな店はお気に入りとなる。こんな調子で今夜もまた街へ繰り出すのである。どちらからともなく声を掛け合つて。

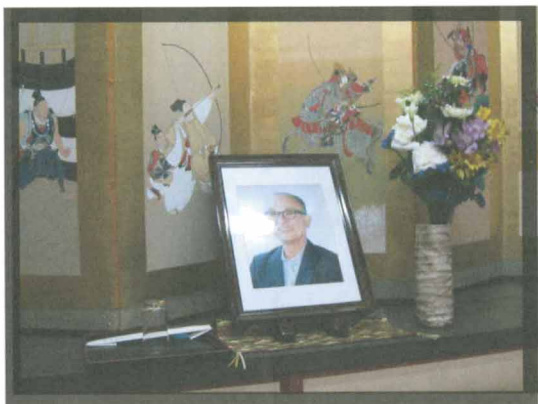
19回 土井 克己

二〇〇八年四月十九日、山城十九回卒の同窓会が幹事さんのご尽力により開催されたので出席した。還暦同窓会である。四十数年ぶりに会う同窓生。なかなかいいものであった。だれだかすぐに分かる人。名前

を言われても思い出せない人。四十数年の隔たりはやはりというか、かなりなものだと感じた。もう一度、青春時代に戻りたいという気持ちとはごく自然なことだと思う。しかし、実際はタイムマシンでもないかぎり、不可能である。ところが、昔の仲間たちに会うことで、気持ちの上では可能になるのである。気になつていた異性が現在どのように変わっているか。あるいは変わっていないのか。特に気にしていた異性は当時のイメージそのままだった。これはご本人の努力の賜物だろう。振り返つて自分はどうか。変わったか、変わっていないか。いや、この際どうでもいい。気にしていたら、同窓会に参加できない。さわやかな一時を過ごした。

辻先生をしのぶ会

平成二十二年五月二十六日
於、西陣魚新



ツン体は優しい先生だった

14回丹保 重雄

入学したときからツン体は恐い先生だと聞いていた。だから授業はいつもシーンとして私語するものもなかった。なつかしいのは「蹴上がり」の授業だった。かなりの時間練習した。私は両足を蹴り上げ上体を起すタイミングをつかんだ。しかし、腕力がなかったのか、最後のところで、背中をポンと押されないとあがれなかった。

テストは体育館であった。順番が迫ってきた。勝負をかける気持と弱気が交錯した。いよいよ自分の番、落ち着いて、いつもどおりやった。最後のところで、背中から先生の「よし、そこやー」という声に押された。体はすつと上がった。蹴上がりがで

きたのは後にも先にもそのときだけだ。

私が教師になって「やればできる」と言い続けてきたが、原点は蹴上がりである。

ずっとたつて、ある研究会で辻先生に会った。先生を目の端に入れないが、目をあわさないよう注意した。



終つて出口まで行つて、ふと顔をあげると目の前に先生がいた。意を決してあいさつをした。先生ははにかんだ表情で「そうかそうか」と言つた。眼鏡の奥がやさしかった。(ツン体はシャイでやさしい先生だったんだ)と思つた。

その後、孫の翔太くんを自転車に乗せて学童保育への送り迎えされる姿を何度もみた。

山城勤務のとき、ある新聞社から昔の体操部の活動について問い合わせがあった。お宅に電話したところ病院のICUに入つておられるとのことだった。お通夜のときなつかしい先生方がたくさんおられ、思い出を語つておられるのをテントの端から見ていた。吉田元監督もいた。

ツン体は間違いなく山城の名物先生だった。

合掌

辻先生に感謝

5回 掛川 清温

私、山城高校へ入学の時は運動神経が極度に低く、前方回転(Denguri 回り)も満足にできませんでした。何とか人並みにと思つて体操部に入部、辻先生の指導を受けました。

つらい練習の毎日でしたが、いつもやさしく、同時にキビシク指導して戴いたお陰で、三年の時には、団体徒手の種目で国体に出場出来、六



位入賞を果たしました。

高校の三年間は、勉強の思い出はほとんどなく、体育館での練習の思い出ばかりです。「やれば出来るのだ、出来たんだ」の経験はその後の社会生活の基本になりました。

辻先生に感謝は今もずっと続いています。ありがとうございます。

辻先生を偲んで

10回 洞本 昌男

高校へ入学して初めての体操の時間、辻先生が鉄棒の模範演技を示された。中学時代までの体操はゲームや陸上・柔道など余り特別の技術を要する経験がなかったので、大変驚き、流石高校はレベルが違うなあとびっくりしました。その後生徒は次から次へと指導に従い殆どの生徒がある一定のレベルまで成長された

のは先生のお力だと思えます。

先生が退職された後大通りで一生懸命歩いておられるお姿に接した折、言葉を交わした想い出話しも、今は想い出です。

辻先生をしのんで

11回 渡部 隆夫

約50年前にもなりますが、在学中、体育の時間には辻先生にご指導いただきました。わたくしは運動神経も鈍く大変お世話をかけた事と思います。特に印象に残っております事は先生のお身体がとても柔軟で若い生徒みんなが舌を巻いておりました。以来少しでも時間を見つけては運動を心がけるようになりました。辻先生のご冥福をお祈り申し上げます。

辻先生をしのぶ

11回 伊藤 信子

勉強より部活が好きで、夏休み中も学校へ通い体育館で体操部と共に、音体部は新体操を辻先生の手拍子に合わせて練習し、汗一杯でも暑さが苦にならなかった。私の音体部時代でした。

参席された皆様が、辻先生への懐かしい思い出を語られて、京料理とお酒が美味しい「辻先生をしのぶ会」ありがとうございました。

素敵な笑顔の先生

13回 平井 隆

中学を出てすぐに実技で親しくなった先生。ご自身で「ツン体」とか「殺体^{サツタイ}」（殺人体操の意）とか名乗られたのを覚えています。バス

ケット部に入った私たち一年生と昼の休憩時間、体育の先生方とゲームをした時、良く走り、とても楽しそうでした。蹴上がりど振り飛びを出来るようにしてもらいました。いつもにこやかな素敵な笑顔の先生でした。

辻先生のこと

14回 高橋誠一郎

「辻先生を偲ぶ会」で思い出話の中に、辻先生の熱心なご指導が数多くあった事に感銘を深くしました。

自分も在学時代に旧体育館でマツト運動の授業をうけたのを懐かしく思い出しました。男性には結構厳しく指導されていたように思います。が、席上「女性には優しくしたよ」との発言があり、辻先生の人情味ある一面を垣間みたような気がしまし

た。

辻先生のこと

18回 瀧川 明子

先日は懐かしい一時を有り難うございました。

辻先生と言えば思い出すことはいつも優しい笑顔で話しをされていたことと体操器具を出したあと、いつも一人で倉庫の中を黙々と掃除をされていたことです。その姿は私の中にずっと理想として残っています。

辻先生の思いで

20回 瀬尾 渡

辻先生とは授業以外での接点や交友関係は全く無かった先生でした。でも辻先生と聞いただけではつきりと思いません。小・中学校での体育の授業は、「こうす

るのだ、ああするのだ」と口と生徒をモデルに先生が説明されていました。でも辻先生の授業は、先生が自ら良い例・悪い例を行い、一生懸命に教えて下さいました。それでびつくりしたのが、当時、先生のニッケネームでもあった「分解写真」。相撲放送でよく見たその「分解写真」の如く、器械体操を各要素々々で静止してその状態のまま説明されるのです。これは本当に辻先生の熱意を感じられ、今でも脳裏にはつきりと残っています。

辻先生のお陰出私の小さな自慢は、辻先生の体育の種目は上手では無かったと思いますが、すべてクリアーしたことです。

お孫さんとの出会い

22回 藤井 幹世

ツンさんには本当にお世話になりました。私が教師になった時「お前が高校の時に書いたレポートがこれや」と三年生の授業で提出したレポートを見せられた時は本当に驚きました。ツンさんの教師の姿を見ました。

そして、私が乙訓高校に転勤したら、何とお孫さんを教えるという驚き。「蹴上がり」を教えて、恩返しをしようと頑張り、放課後も残して教えましたが出来ず、ツンさんの偉大さを感じました。

さらに、その妹さんをもまた担任したというご縁がありました。ご冥福をお祈りします。

ドイツ・フィルダーベンデン校との交流

英語科教諭 中田 好則

始まり

フィルダーベンデン校との交流は、本校卒業生であり学校評議員でもある中村さんご夫妻が、2000年にイタリアのフィレンツェの美術館の前で、フィルダーベンデン校で日本語クラブを担当するザビーネ先生に偶然出会ったことが始まりです。前に並んでいた中村さんのリュックに書いてある名前をザビーネ先生が読んで「中村さんですか?」と話かけたのがきっかけで中村さんとザビーネ一家との交友が始まりました。

その後ザビーネ一家は、ザビーネ先生の立命や関学への短期留学などで、何度も京都に滞在することになり、中村さんとの交友関係も続いていました。ある時ザビーネ先生が、フィルダーベンデン校の生徒と日本の高校生との交流の機会をもちたい、と中村さんに相談しました。ちょうど学校評議員をしていた中村さんが、当時の山城高校校長に取り次いで、本校会議室でザビーネ先生が、是非交流プログラムをスタートさせたい旨熱心に学校関係者に伝えました。

その後、本校生徒とフィルダーベンデン校生徒の間で文通プログラムなどが始まりましたが、2004年秋に当時の橋本陽生校長がドイツ訪問団の受け入れを決め、2005年秋にザビーネ先生を団長とするドイツ訪問団が本校を訪れるのです。

初来日

9月29日に清水寺で初めて彼らを見ましたが、上は大学生から下は14歳の日本と言えば中学生までの集団でした。彼らの町、Moesにはフィルダーベンデン校の他にギムナジウムが三校ありますが、日本語クラブがあるのはフィルダーベンデン校だけで、他のギムナジウムの生徒も訪問団に居ましたので、混成部隊というイメージでした。

山城高校にはESSクラブがありませんので、彼らの来日前に、急速交流ボランティアを募り、ボランティア生徒を中心に、学校案内や部活紹介などのプログラムを組みました。PTA、同窓会のご支援を頂き、授業体験以外にもお琴演奏や、嵐山遊覧などの経験ができ、大変好評で

した。本当は日本の家庭も見せたかったのですが、初めての交流ということもあり、ホームステイプログラムは組まずに、半日の家庭滞在プログラムを用意しました。また、体育祭に特別参加してもらったのですが、こういう行事がドイツにはなく、生徒だけでなくドイツ人先生までもが大はしゃぎで参加していたのが印象的でした。

若い人たちはすぐに友達になります。言葉はあとで付いてくる、というのが私の印象です。一緒に何かをする中で、伝えたいことが出てくる。それを何とか身振り手振りを交えて伝えようとする中で、言葉は生きた意味を持つのです。訪問団の一人と仲良くなった当時の三年生が、英語が通じた、上手だと褒められた、と嬉しそうに言っていたのを思い出し

ます。こういう経験こそが将来に生きてくるのだと思います。

留学生

当初、訪問団にナディアという生徒がいました。ザビーネ先生が是非日本を見せたい、と考えていた生徒ですが、直前になつて家庭の事情で来日できなかったのです。何とか留学生として預かってくれないか、という依頼がドイツからあり、2006年一学期に受け入れることにしました。山城高校卒業生で、現本校教員である飯島柳子先生（当時桃山高校教員）がホストファミリーを引き受けて下さり、ナディアの留学が実現しました。当時のAFS留学生、アグネタと一緒に図書館で日本語を一生懸命勉強していました。その後ナディアは日本語の勉強を続

けることになります。

ドイツ訪問

2006年夏に、本校生徒13名と、当時の橋本陽生校長と私、中田がMoersを訪れます。日程の都合で一週間の短期滞在となりましたが、全員ホームステイさせてもらいました。生活を共にすることで学ぶことは多く、生徒だけでなく我々も多くのことを学びました。ドイツの中でもバイエルン州はほぼ「外国」であること、石炭とライン川がルー地方の発展の原動力だったが、今や構造改革を迫られていること、若い間に異文化に触れることの重要性など、期間は短かったですが、考えることは非常に多いステイでした。

また日本留学を終えたばかりのナ

ディアがホストファミリーを務めたり、山城高校生徒のプレゼンテーションを手伝ってくれたりと大活躍でした。一回目の日本訪問団の一員であったザンドラがこの年の秋から龍谷大学に留学。日本語の勉強を続け、現在も大学でザビーネ先生の手伝いをして日本語教科書の作成に取り組んでいます。

我々の訪独の後、フィルダーベンデン校の生徒、マルセル君が本校への留学を希望します。複数のホストファミリーにお世話になりました。マルセル君は当時の2年7組(Ⅱ類人文系)に入りますが、クラスにすっかり溶け込んでいました。またマルセル君は二回目の訪問団に加わり、当時のクラスメートと再会します。その後、当時のクラスメートは高校卒業後も、マルセルの自宅を訪

れたりしているようです。

ホームステイプログラム

2007年秋に、ドイツ訪問団が二回目の来日を果たします。今回は3〜4泊のホームステイプログラムを組みました。我々がMoosを訪れた時の経験から、是非、ドイツ人生徒に日本の家庭を見てもらいたかったのです。今回も前回同様、授業参加、PTA、同窓会のご協力による文化体験などを用意しました。ホームステイプログラムは大好評でした。一回目のステイプログラムが終わっても、個人的に二回目、三回目のステイを経験する生徒も出てきました。お友達の家にお泊まりに行く、という感じで行き来していたようです。若い人たちが自然な形で友達になる、国際交流の意味はここ

にあるのではないでしょうか。考えてみたら、国際交流というのは、友達づきあいが国境を越えて広がった、というに過ぎません。若い人たちの友達づきあいを大人が見守る、そんな感じのステイプログラムでした。

変わるルール工業地帯(二回目の訪独)

2008年夏、本校から二回目の訪独団がドイツを訪れます。当初、10名の生徒を連れて行く予定でしたが、予算の都合で5名の訪問になりました。実は一回目の訪独もそうだったのですが、ベルリンにある日独交流基金Ⅱたけのこ財団(ダイムラー社出資)の資金援助を得て、訪独しているのです。具体的には往復の航空機運賃を持ってもらっているのです。この財団は日独高校交流事

業の立ち上げに協力する、というのが趣旨で、二回目となる今回の訪独は50%の支援しか貰えませんでした。

二回目の支援を申請するにあたって、ベルリンからはよほど特徴のあるプログラムを作らないと、援助は難しいと言われていました。そこで今回はルール地方の構造改革をテーマにすることにし、フィルダーベンデン校で化学の授業（＝製鉄実験）や地理の授業（ルール地方の地理学習）をした後、実際にかつての溶鉱炉後の見学や、文化芸術都市として生まれ変わるうとしているエッセンを訪問したりしました。

今回、フィルダーベンデン校の校長はフィッツトム女史からホフマン先生に替わっていました。ホフマン校長は、古代ローマの遺跡、クサンテンで本校生徒とフィルダーベンデン校生徒

が、それぞれ自然な形で交流をする様子を見、このプログラムを進めていく決心をしたと言います。これからの時代は外国の人たちともうまくやっていくことが求められます。友達づきあいの範囲を広げていくことが、長い目で見れば大切なことだ、と言う認識があるのでしょうか。

さて、今回もナディアが通訳などで活躍してくれました。ザンドラとMeelsで再会できたのも嬉しかったです。一回目のドイツ訪問団のメンバーだったBoernやJukaとパブで再会。新しい友人を紹介してくれ、ドイツ社会の諸問題や日本社会の問題などについても意見交換できました。また一回目の訪独時の校長フィッツトム女史とも再会し、会食の機会が持てました。生徒だけでなく我々のレベルでも友達の輪は広

がっています。

今回の訪独の後、ホストファミリーを務めてくれたシュモルト家（お母さんがPTA会長）のベレニケさんが本校留学を希望。2009年の一学期に2年9組（文理総合）で勉強しました。ベレニケさんはすっかりクラスに溶け込み、三回目の訪日団にも加わり「お里帰り」を果たします。

三回目の来日

2009年秋、ザビーネ先生、アネット副校長らの引率で、三度目の訪日団が来校しました。今回は日程の都合で体育祭には参加できませんでしたが、授業参加やホームステイプログラムを通して、日本の生徒と友達になっていきました。今回から本校以外にも立命館大学大学院生と

の交流プログラムや、詩の朗読会などにも参加、着実に日本における拠点を広げているようです。

今回のステイの後、ザビーネ先生の娘ユリアさんが本校に留学を希望。2010年2月より7月まで本校で学びました。現2年10組（文理総合）で勉強の他に遠足や球技大会などを楽しみ、高校生活を満喫したようです。また、男子生徒と女子生徒のどちらにも話ができるので、クラス間の交流にも一役買っていてようです。

今後の交流

今年の夏は、本校からの訪独の番でしたが、いろいろな事情が重なり、訪独を見送りました。たけのこ財団の援助が受けられないことがやはり大きな原因です。お互いに行ったり来たりする中で、自然な形で友



達になっていく、というのが理想ですが、今後は受け入れを中心とした交流になることも予想されます。



す。草の根の活動は、始めやすいのですが、継続性という点で難しい面が多くあるように思います。できる範囲で交流を進めていくことが大切で、何とかこの事業を続けていきたいと考えています。同窓会の皆様には引き続き物心両面からのご支援をよろしく願っています。



本校の国際交流の現状

企画推進部長 北山 勉

山城高校では数年前から国際交流の事業の一環として、ドイツ・フィルダーベンデン校と姉妹提携をし、留学生の受け入れなどを行っております。本校で受け入れた留学生は、ホームルーム活動や授業を受けるとともに、大学生の学生ボランティアから日本語を習ったりもしています。また、文化祭、体育祭、球技大会などの学校行事にも参加し、本校生徒とともに楽しく、有意義な生活を送り、普段の生活に支障のないくらいまで日本語をマスターし、また日本の生活習慣、慣習や文化を理解して帰国

しています。現在は、財団法人AFS日本協会からの留学生で、ブルネイからの男子生徒が来ており、1年文理総合科の生徒とともに勉学に励んでいます。

一方、本校の生徒、特にホームルーム活動などを留学生とともにした生徒達に対しても、意思の疎通の仕方や異文化理解という意味で大きく影響をしています。私自身、外国人との会話に対する不安感みたいなものがある、なかなか会話をしようとしなないというものがあつたのですが、実際にブルネイからの留学生と話しをしてみると、ボディ・ラングウエッジとかをいれると何とか会話が成立する、ということを学びました。本校の生徒達にも同じことが言えると思います。身振り手振りで会話をする、そういった状況が多く

見受けられ、留学生にとつても本校の生徒にとつても、成長期の果敢な時期をお互い影響しあつて過ごしていると思います。さて、こういった国際交流を継続していくには、大きく二つの問題点があります。一つは、本校に受け入れる場合のホームステイ先のことです。留学生はだいたい半年くらいの期間で滞在します。そういう長期滞在を受け入れてもらえるような御家庭が本校にはなかなか見つからない、という点です。日本にそういう風習がないのと、居住空間やお金の問題、また何かあつたときの責任問題ともからみ、本校在学中の生徒の御家庭に募集をしても、殆どまったく見つからないのが現状です。(今年度一学期までの、ドイツからの留学生は、在学生の御家庭や同窓会の方で一ヶ月ずつ交代でお

世話いただきました。

留学生のホームステイ先については、在校生の御家庭はもちろんのこと、京都日独協会、京都市国際交流協会にも依頼をし、募集等をしていただいています。未だ良い返事をいただいていないのです。

もう一つには、本校からフィルダーベンデン校に送る生徒のことで。この場合は、金銭面が問題です。期間は一週間から十日程度で、ドイツではホームステイをさせてもらい、その滞在費用の点もありますが、問題は往復の航空運賃なのです。姉妹提携した学校間での国際交流であるのですが、日本の社会状況等を考えると、その航空運賃が出ないのが現状です。

しかしながら、このような問題点を抱えながらも、この国際交流を継

続することは双方の生徒にとって、また今後ますます国際化が進んでいく日本にとっても有意義なことであると思われます。したがって、今後本校でできる範囲内での国際交流を模索していくことをやっていこうと考えています。

最後になりましたが、今年度から同窓会の方から国際交流にかかる資金援助金として、年間五万円をいただくこととなりました。山城高校同窓会の方々には、末尾ながら御礼を申し上げます。

各期・各会の報告

◆同窓会本部役員有志座談会（三月一日（日）、於・「やましろ」）

卒業式も無事終わり、ご苦労さまでということで慰労会をした。出席者は森会長、今井副会長、洞本副会長、丹保常任理事、伊藤常任理事、高林副会長。主な議題（話題？）は①五月の計画されている同窓会理事総会で理事を選出していない学年をどうするかなどの具体策について②「会報」の充実について ③その他

あとは森会長の連続五十回に及ぶ卒業式出席を通してみた式の今昔についての物語でした。このような楽しい試みは従来なかったことなので、今後は活性化のための方策として座談会を定期化することも検討し

ようということになりました。



◆陸上部卒業生を送る会（三月一日（日）、於・「やましろ」）

卒業生六名と先生二名を招いてお好み焼きを主に晩餐会を開いた。

未成年はアルコールはだめ教員も生徒の前では駄目ということで、ウーロン茶で辛抱した。OB会からは高林会長が出席した。

◆双陵クラブ定例昼食会（三月十日、於・魚新） 参加九名



◆山城陸友会（陸上競技部OB会）例会（三月十二日於・ミュンヘン）

◆編集会議（三月十七日、於・味禅）

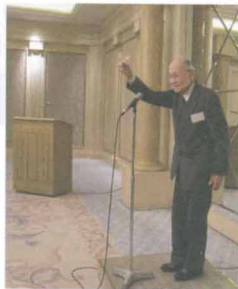
◆小島事務長歓送会（四月三日、於・味楽座） 母校事務長小島悦治氏の定年退職を記念して同窓会幹部有志で歓送会を実施した。参加十三名。



◆双陵クラブ第三回総会(四月十二日、於・センチュリーホテル)

出席 四十九名 最古参は第二十八回卒業(昭和十二年)の船越滋氏

船越氏の発声で乾杯をした。船越氏は九十一歳でまだまだお元気です。



乾杯の音頭をとる船越氏

◆山城18回同窓会

5月15日(於・日航プリンセス)

山城18回卒同窓会に一四〇人結集

山城十八回 中尾四郎

「団塊の世代」の炎 いまだ衰えず

初の日米テレビ同時中継、第一報はケネディ米大統領暗殺の悲報Ⅱ昭和三十八年一月

東京五輪開催、東洋の魔女、マラソン円谷幸吉選手らの活躍に大感激Ⅱ

三十九年一〇月

ベンチャーズ再来日でエレキブーム

絶頂、学園祭でも生バンド演奏Ⅱ

〇年一二月

私たちが在籍した山城高校三年間で、とある出来事を学年順に並べてみた。あれから幾星霜、還暦も過ぎ現役を退いて時間の余裕が生ま



れ、ふと卒業アルバムを開きかつてのクラスメイトを懐かしむ時も…。そんな心模様を見透かしたかのように「同窓会の案内」が届く。「あの人は出席するのかな」「場に溶け込めず壁際で独り…」と期待に不安が交錯した思いで、古都の新緑が映える五月十五日夕、会場の「ホテル日航プリンス京都」を訪れる。

ホテルのフロント前はOB・OGで埋まり、再会を喜び交わす挨拶や笑いに包まれた雰囲気で一氣に四十五年前にタイムスリップ。通学区域内に西陣を擁したこともあって、和服姿の女性が一層の彩を添えオジサン連の表情は和む。書道家の塩見裕子さん直筆の名札を胸に一同円卓に着き、伊藤禎彦君の司会で宴は始まる。「私たち十八回卒業生は十二クラス・六百人余、他界さ

れた方四十人のご冥福をお祈りします」。「五百人に案内状を送付し、予想を大きく上回る百四十人（男性八十一、女性五十九）が出席、遠方ではオーストラリアから加藤孝君、沖縄から永田均君、福島・いわき市から市田淳二君はじめ首都圏、四国、北陸からも多数が駆けつけてくれました」の報告。さらに「同級生同士のご夫婦五組が手を携えて出席」と紹介されると祝福の大きな拍手が沸く。続いて乾杯の音頭は道井博夫君、「今回が最後との声もあるようだが、これから開催を続けて、団塊の世代の炎を燃やし続けよう…」と野球部時代そのままのフアイトあふれるスピーチ。

各テーブルでは旧友とのオシャベリが何よりのご馳走で、供された料理はそっこのけで談笑が続く。「汗

臭い部室での喫煙で三日間の停学処分」とか「清楚な後ろ姿に魅せられて遠回りして下校した」など悲喜交々の思い出や近況を熱く語り合う。「ザ・フォーク・クルセダーズ」元メンバーで、今もリサイタルを開く平沼義男君は当時のままの美声を披露。二時間が瞬く間に過ぎ去る。続いて同ホテル内で二次会、立食形式で話し相手との距離感がさらに縮まり、誰が用意したのか「オクラホマ・ミキサー」の曲に、何十年ぶりのフォークダンスの輪が広がる。ステップはいささか不揃いだがパートナーと組む手には力がこもっている。まるで舟木一夫の往年の名曲「学園広場」を思わせるような光景。日付変更線を越えても三、四次会が市内各地で催されたようだ。

「高齢化社会」に名実ともに仲間



水面下のご尽力と出席の皆さんのお

入りし
た私
ち「団
塊の世
代」第
一号。
百四十
人も同
窓生の
元気の
な姿に
再会で
き、と
もに励
まし合
えたの
も、世
話役の
方々の
陰と改めて感謝。最後に校歌にある
「正義 真実 責任の…」気概はや
や色褪せつつある昨今だが、これか
ら「命みなぎる」心意気を持ち、
今一度一堂に会して「双ヶ丘に鐘」
を高らかに鳴らしたいものだ…。

◆山四会

5月16日（於・京都ホテル）

◆さくら会（山城1回）

6月7日（於・タワーホテル）

◆山城11期同窓会

6月13日於・日航プリンス

まず集合写真の撮影。続いて同期生の同期生の琴演奏で始まりました。美味しい酒と料理を懐かしい仲間
で頂きながら楽しい賑やかな会となりました。中頃に出来立ての集合写

真と共に会誌「双ヶ丘」を配布し、皆さんへ会誌の紹介を致しました。記念のよいお土産になり喜んでおります。

おかげで話題も弾み二次会にも百名ほど残り五時頃まで名残を惜しむ大盛会でした。

そんな訳もありまして会費を使いすぎました（どこかの国の経済のようです）会から印ばかりのカンパしできません、心苦しいですが感謝の気持はいっぱいです。ありがとうございました。お世話ばかりかけますが、今後とも見捨てずよろしくお願い致します。

◆山城十九回卒業生3年1組クラス同窓会

卒業後、初めてのクラス同窓会。
6月6日（日）北区鏡石町の「しようざん」に十四名（女性四、男性



十）が出席。世はまさに高度成長期の東京オリンピック開催年に入学しました。団塊世代の真つただ中の大所帯は、1クラスに五十人以上も詰め込まれ、校舎は急造プレハブのクラスが二組…と記憶しています。全十二組の総勢六二七名…。実は2年前の2008年4月に、卒業後初の全クラス同窓会を中京区のホテルで開催、恩師二名（森貞男、細川磐の両氏）と一八三名参加。その時に法事や所用で出席できなかった仲間の声から「近いうちに企画を」の声が出

あがり、今回1クラスのみの開催ですが夢実現、といういきさつのもとに集いました。

四十三年ぶりに再会した仲間も、時間の経過とともに「山城時代」にタイムスリップ。当時は進路対策に追われ、一言も会話せずに卒業した仲間もいて、今も住所不明者八名、物故者一名…寂しい気分も味わいましたが、2時間の歓談はあっという間に過ぎお開き、笑顔いっぱいであ秋の再会を誓い合いました。

（瀬川 司）

三中39期生の同窓会

三十九回 相田 正雄

さる六月七日、京都府立京都第三中学校の最後の卒業生三十九期生の同窓会「さくら会」が京都タワーホテルで五十余人の参加を得て盛大に

開かれました。

昭和二十三年の教育制度の改革「六三三制」の施行で、五年制の中学校がなくなり、京三中の名も消え、当時、三十九期生だった五年生が最後の卒業生となりました。

三十九期生の過ごした五年の中学生活は、激動の時代でした。太平洋戦争が激しさを増してきた昭和十八年に入学、学徒動員、終戦、国家体制の百八十度転換と日本の歴史の節目を体験してきました。貴重な体験ですが、一度とあつてはならないことです。

こうして京三中を卒業して、すでに六十二年が経ちました。数字を見ると恐ろしくなります。この長い間に日本の国も社会も大きく発展、時代人も変わりましたが、同世代と共に生きて来た者同士の集い、同窓会はかわりはありません。

受付で名札を受け取り、会場に入ると、そこには、もう懐かしい顔ぶれの人の輪が出来ていました。

「さくら会」の世話役四方修氏の開会の挨拶に続いて、川上のぼる氏が乾杯の音頭をとり、和やかな会は始まりました。

入学当時、三百人の生徒がいたのですから見知らなかった人、初めて参加した人などもありましたが、互いに紹介しあうと、すぐ旧知の間柄になりました。

中学の少年時代と同じ教室で学び、遊び、時には悩んだ者同士が、当時の思い出や社会での体験、子や孫を持つ身となった近況を話し合う内に閉会の時間となりました。

最後に、こぶしを握り「朝に仰ぐ秀嶺愛宕……」の校歌を合唱する皆の姿は往事のままで、長い年月を忘

れさせる楽しい集いでした。

◆一月二日の会幹部会

九月十一日（土）於、西陣魚新
参加者三十五名

◆編集会議

九月三十日、於・上七軒「小きみ」

◆体育祭 於・本校

十月一日、本校体育祭。

◆同窓会役員会 於・会議室

(京都新聞社の御好意により、平成八年六月に新聞紙上に連載された「半田動員の記録」を転載させていただきます。)

『防人(さきもり)の詩(うた)』 続

(三)

京都三中の学徒たちが大挙して愛知県内に集団動員され、航空機の生産作業に従事することの決定をみたときに、それが自宅を遠く離れた地域での初めての長期にわたる寄宿舎生活であることに、だれもが濃淡の差こそあれ、不安とまどいを感じていた。このとまどいをわずかでも緩和さすためには、動員地での暮らしの日々を支える日常の身の回り品

を、まずはきちんと用意することであつた。だが、すべての日用品は嚴重な統制経済下の配給制であつて、それらを簡単に入手することはできなかった。

それでも学徒を送り出す各家庭で

若人よ元氣で

出勤学徒、晴れの報告願書に

宣司 感激の飛入り祝辭

へ外府さい

新聞に報じる学徒たちの出発

神旗捧げて

第一陣部隊勇躍進發

（以下、新聞記事の抜粋）

（以下、新聞記事の抜粋）

は、家族たちが、遠隔地での不自由な思いをしないように配慮し、乏しい日用品のなかからではあつたが、動員学徒の所持品には細心の注意を払いながら各種の用品を取りそろえていた。同中学四年生の編集した文集「学徒勤労働員の記録・紅の血は燃ゆる」の一学徒の手記によれば、彼の家族の用意してくれた所持品は——制服・制帽・ゲートル・靴・手ぬぐい・歯ブラシ・歯磨き粉・コップ（ガラスにあらず）・チリ紙・弁当箱・箸・水筒・靴下・寝間着・着替え・肌着・敷き布・まくら・針と糸・洗たく石けん・干し物ばさみ・下駄・ぞうり・雨傘・常用薬・ふる敷・以上の日用品を一括して入れる袋——となつていた。

さらに、これらの日用品のほかに、防毒マスクに代用できる三角巾や

ハガキ、動員学徒標識、名札、転出証明書、衣料切符などが用意され、通信用品としての封書は検閲のために使用不可となっていた。そして、学生の身分ともされる勉学のための教科書なども最低限ではあったが持参することで、他に作文用紙、筆記具なども用意されていた。

そして、これらの用品はそれぞれの学徒がリュックサックに入れ、あるいは信玄袋に収めて勤労動員地へ持参するかたちとられていた。

そして、これらの動員学徒を送り出す当日の朝の様子は新聞紙上にも大きく報道され、これらの記事の見出しには「いざ府外へ 若人よ元気で」との大きな活字がおどっていた。

このようにして車内のひとつとなった学徒たちは、それぞれが車窓にみる光景に視線を移しながらも、明日

から始まる動員地での日常への思いに、だれの表情にも硬いものが読みとれた。これらの学徒のなかの一人は文集「紅の血は燃ゆる」のなかで――。

「しゅう雨も関ヶ原を過ぎるころから晴れてきた。車窓には整然たる青田がひろがり、農家の活躍がしのばれる。列車が中京に入るや、新興工場の林立するのが望まれる。

沿道の人々は我々を出征兵士とも思ってたか、ことごとく手を振って下さる。名古屋駅は完全に迷装され、市内は見事なまでに疎開が行われ、いたるところに小空地がみられる。鉄路上では客車以上に貨車の往復の頻繁なのに驚く」

こうした学徒たちの緊張の旅は午後四時すぎ、その目的とする終着駅に到着したのだった。「列車は午後

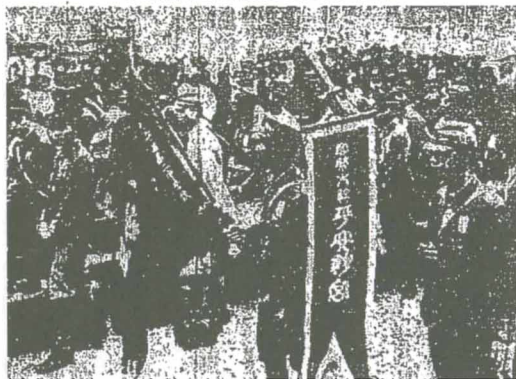
四時すぎ、乙川に到着した。ここから徒歩で二十分間のところに中島飛行機半田製作所の乙川新池寮があった。この寮は、はるかに海を臨む高台にあり、寮舎は木の香も新しい建物であった」「だが、洗面や便所の設備はなお、工事中とのことで不完全であった。この日の夕食は色の黒い固い飯に、じゃが芋であった。」その後に入浴し、点呼を終え、午後九時半に我々は動員地での第一夜の夢路に入った」

(四)

京都三中の学徒たちが愛知県内への集団勤労動員の指示を受け、任地への出発のため京都駅前に集合した日の朝、同中学三年生、里田嘉彦君（十五歳）の姿もその隊列のなかに

みられた。里田君は——「自分の家ではその日の朝、京都駅前に集合した自分を見送るために父と母が来てくれていた。そのとき、両親ともに多くを語ろうとしなかった。ただ、その表情には固いものが感じられた。その固い表情が何を物語るのか、自分にも分かるような気がした」「自分の思ったのは十四・五歳の少年を親元から離れて遠くへやることへの不安だろうと推測した。確かに、どの親とても同じような不安を抱いているように思えた。だが、親たちの不安はそのような漠然としたものではなく、もっと具体的で、鮮明なものだったことを後になって知ったのだった」「それは第一に空襲への不安であった。すでに本土への空襲は必至とみられており、軍需工場の集中する中京工業地帯への大空襲は、

京都駅出発前の勤労学徒隊

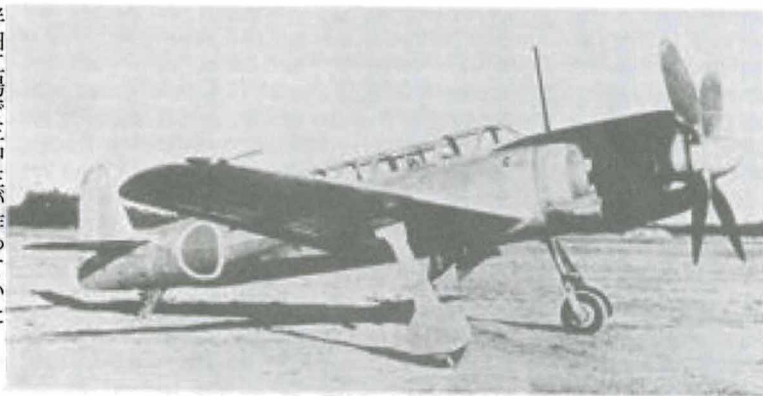


大人人ならば当然に予想できる状況下にあった。そのような最悪の事態が待っているとところへ出かける自分たちの見送りとなれば、その表情の固くなるのも当然であった」「だが、出発する自分たちはそんなことまでは考えてもいなかった。

とにかく『聖戦貫遂』の標語どおり、お国のために懸命に働くのだとの気持ちでいっぱいだった。そのことでは親たちの方も、戦争には勝たなくてはいけない、と思っていた。だから一方では戦争に勝つための協力の必要なことを強く感じながら、その一方では自分の子供がそのような隊列に身を置くことへの葛藤ともいうのか、それが固い表情での寡黙の見送りとなっていたのだった」「京都駅を離れた列車は一路、東方へ走り続けていた。この列車が関ヶ原あたりを通過するとき、車窓の向こうの農家の人たちが大勢で並んだまま手を振ってくれるのをみた。よく事情は分からなかったが、列車の横に何か、横断幕のようなものを取りつけていたのかも知れない。その幕に何かが大書してあったので、こ

れをみた田畑の人たちが一斉に手を振ってくれているように思えた」「この列車は自分たち動員学徒のための専用列車に仕立ててあった。車内には京都三中の学生がいっぱいであった。その列車が目的の愛知県内の駅に到着した。下車した自分たちは駅前から徒歩で寄宿舎に向かった。その我々を迎えてくれた寄宿舎は、まだ青畳のにおいのする真新しい寮であった」「だが、困ったことに部屋割りの終わった後の状態は、一部屋15畳に14人の入室となった。これでは狭すぎると思ったが、どうすることも出来なかった。この狭苦しい部屋事情はその後いろんな難題をもたらししたが、そのひとつに夜間、便所へ行くときにだれもが難儀しなければならなかった」「それというのも夜の就寝後は空襲に備えて嚴重

な灯火管制下に置かれていた。このために便所に行くときも電灯はつけないまま、真つ暗な部屋の中を通らねばならなかった。当然ながら級友の足をけったり、頭を踏みつけるときもあった。だが、だれもが文句は言わなかった。それはお互いさまのことだったからであった」「いまひとつの悩みは、新装の寮として最初は清潔に思はれたが、間もなくノミの大量とシラミの行列が自分たちを襲ってきたのだった。そのなかでも自分はとりわけうまかったのか、ノミやシラミの来襲がひどかった。これには、ほとほと困りはてる毎日となったのだった」



半田工場で三中生が作っていた
海軍偵察機「彩雲」

平成 21 年度 京三中・山城高同窓会 会計報告書

平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日 (単位 円)

収入金額 6,271,129

支出金額 597,413

差引残高 5,673,716 (平成 22 年度へ繰越)

収入の部

項目	金額	明細
繰越金	5,110,248	前年度から繰越
入会金	1,050,000	平成 21 年度卒業生入会金 350 名分
雑収入	110,881	協賛金、預金利息
合 計	6,271,129	

支出の部

項目	金額	明細
同窓会活動推進費	50,000	部活動全国大会出場激励金、ホームページ管理費他
山城塾開催経費	21,550	2 回開催 講師交通費等
記念品費	227,850	平成 21 年度卒業記念品 卒業証書ホルダー
会議等経費	298,013	理事総会開催費、双ヶ丘発刊費、郵送料他
合 計	597,413	

平成 21 年度 同窓会名簿編集会計報告書

収入金額 1,287,460

支出金額 0

差引残高 1,287,460 (平成 22 年度へ繰越)

収入の部

項目	金額	明細
繰越金	1,286,678	前年度から繰越
雑収入	782	郵便貯金利息
合計	1,287,460	

支出の部

項目	金額	明細
—	0	
合 計	0	

会計報告・会計監査報告

上記の通り報告します。

平成 22 年 4 月 3 日 会計 今井 正治
会計 長砂 佳明

上記会計を監査の結果、適切に処理されているものと認める認める。

平成 22 年 4 月 3 日

会計監査 押谷誠之助
会計監査 高見 潔
会計監査 前川 明範

同窓会年度理事総覧

三 中			
回	年	会 名	理 事
29	S 13	双鳩会	中西雄太郎・
31	S 15		江羅 寿夫・森田 久男
32	S 16		吉田 邦夫・森田 高明
34	S 18	八八会	大島 達也・藤本 泰雄
35	S 19	三五会	森本 皓昭・西村 山治
36	S 20	麓々会	一色 逸雄・
37	S 20	三七会	高林 藤樹・
38	S 22	三八会	押谷誠一郎・若林 實
39	S 23	さくら会	
40	S 24	一九会	
山 城			
01	S 24		片岡 光泰・久下 英雄
02	S 25	山二会	森 貞男・井上 昌道
03	S 26		高見 潔・山中 英治
04	S 27	山四会	三中西久雄・福地純一郎
			神谷 治美・今井 正治
05	S 28	山五会	太田 泰三・山田 喜之
06	S 29	山城六会	和田 脩・渡辺久美子
07	S 30	五目会	小島 和光
08	S 31	山八会	水谷 浩之・鳥越 雅子・正木 一克
09	S 32	九思会	鶴飼 忠男・田中 勲
10	S 33	山酔会	洞本 昌男
11	S 34	11 回同窓会	坂田 憲男・渡部 隆夫
			伊藤 信子
12	S 35	12 回同窓会	小寺 啓介・吉田 茂
13	S 36		村端 豊資・
14	S 37	一四会	丹保 重雄・高橋誠一郎
15	S 38		山北 光一・山田 一道
16	S 39		小林 正隆
17	S 40		澤田 安之
18	S 41		伊藤 禎彦・木村 文子
19	S 42		中村美知子・
20	S 43	ニイニイ会	伊藤 令子
21	S 44		南 綾子
22	S 45		
23	S 46		
24	S 47		
25	S 48		
26	S 49		増川 稔晃・松村多美男
			松居 康正
27	S 50		豊島 順也・仁田一明
28	S 51		中村 哲也・

29	S 52
30	S 53
31	S 54
32	S 55
33	S 56
34	S 57
35	S 58
36	S 59
37	S 60
38	S 61
39	S 62
40	S 63
41	H 01
42	H 02
43	H 03
44	H 04
45	H 05
46	H 06
47	H 07
48	H 08
49	H 09
50	H 10
51	H 11
52	H 12
53	H 13
54	H 14
55	H 15
56	H 16
57	H 17
58	H 18
59	H 19
60	H 20
61	H 21

上田 雅和

慶田 真澄

坪野優太郎

八木 睦乃

寄付者芳名

(二〇年三月一日〜二〇年まで)

鈴木照代・三野々村晃・18中尾四郎・
三三木下総一郎・5狐野美代子・三五
松村篤之介・5野村藤雄・佐々木功・
高橋誠一郎・曦洋子・鈴木和子・小
野真佐子・滝井繁男・三八小畑修一・
5江坂素一・5木村英生・三一平井邦
男・三五大島達也・18伊藤禎彦・18
深井俊明・18松本文子・5浦谷照雄・
5川嶋寛爾・12吉田茂・18徳山敏博・
18芳村伸男・18松本文子・4水谷公治・
18須田美智子・18川上隆雄・18平野進・
18福井和子・11期同窓会・11伊藤信
子・11川村孝爾・11松原廣始・三三森
田久男・4小島渡史子・20日詰正勝・
真喜子・11柴田清一郎・18梅原健一・
19瀬川司・11西川剛史・18佐々田芳江・
2森貞男・5高林藤樹
(漢数字は三中卒業回、アラビア数字は山城卒業
回、団体名と匿名氏は年度なし、実名氏は敬称略)

編集後記

◆ 暑かった、そして長かった夏も
ようやく過ぎました。今号はそのせ
いで発行がおくれてしまいました。
何故？編集子が夏バテ？そんなこと
はない、あの強い人のことだ。でも、
ともかくほっとしました。

◆ ご批判・感想など、どんどんお聞
かせください。

◆ 「強い、チームは補欠も燃える」
同窓会が強ければ学校も繁栄する。
ではどんな時を強いというのか。そ
のバロメーターがこの会誌「双ヶ丘」
であると思つて編集部は頑張つてい
るのです。

応援よろしく願ひします。

(T)

京三中・山城高同窓会会誌

「双ヶ丘」第四号 (非売品)

二〇一〇年十月十五日 発行

発行人 会長 森 貞男

編集長 5回 高林 藤樹

次長 18回 伊藤 禎彦

会計 26回 松村多美男

事務局 京都府立山城高等学校内

京都市北区大將軍坂田町二九

電話〇七五―四六三―八二六―

編集部 山城高校五回卒 高林藤樹方

京都市左京区田中大堰町二二九

電話〇七五―七八一―八九二五